

当社がシンガポールに拠点を構えたのは今から50年前、1974年のことである。同国で事業を開始してからわずか4年目の78年、「チャンギ空港第1ターミナルビル」(延べ床面積22万平方メートル、地下1階地上5階建て)を受注する好機に恵まれたことで、当社は大きく歩を進めていくこととなる。

事務所開設時には10人程度だった組織は、この「チャンギ空港第1ターミナルビル」が最盛期を迎える頃には駐在員約100人、ローカルスタッフ約150人まで一気に拡張した。着工から3年後の81年5月には無事に引き渡し、同7月に東南アジア諸国連合(ASEAN)最大規模の新たな現代的空港として運用が開始された。その後、当

チャンギ空港第2ターミナル増改修工事

海外建設協会 プロジェクト便り

◆シンガポール

緑あふれる世界有数のハブ空港へ再生

竹中工務店

社は43年にわたり、チャンギ空港に関連するプロジェクトを大小20件以上手掛けている。今回取り上げるチャンギ空港第2ターミナル増改修工事は、稼働中の空港内で供用しながらの全面改修・増築工事である。



設計コンセプト「自然からの着想」に基づき、無限の流れを表現する光沢のあるシャンパンゴールド色のアルミ押出材の3次元曲面ルーバー天井、地層を模したスタッコ(しっくい)壁、海と陸を模したカーペット、緑化された壁・柱など、自然の要素がターミナル内の至る所にシームレスに散りばめられた。静謐(せいひつ)で落ち着きのある空間が、利用者に静けさかつろろぎを与える、世界有数のハブ空港として、シンガポールの玄関口にふさわしいターミナルを目指した。

当プロジェクトは2019年11月の着工直後、新型コロナウイルス感染症が蔓延した影響を受け、当局指示による6カ月の工事中断となった。その時、建

2階トランジットエリアにある「Dreamscape」

コロナ禍でも工期短縮への挑戦



2階出発ホール

元曲面ルーバー天井は、フランス人デザイナーによるコンセプトスケッチから、3Dモデルでの詳細検討と試作を繰り返すことで、最終的にV字形のアルミ押出材の強・弱軸2方向への曲げ加工により滑らかな3D曲面を作り出し、計5回の実大モックアップを通じて高精度な天井を実現した。

次にスタッコ壁は、フランスを代表する仕上材であるしっくいを使用した。パネルの波目模様や形状が異なるため、全2420枚すべてのパネルに対して製作図を作成し、フランス・パリの工房で手作業で製作した。

さらに現地構造基準に準拠するため、パネル裏面に炭素繊維補強を施し、世界に類を見ないスタッコ壁を実現した。チャンギ空港とデザイナーが描いた内装仕上アイデア、その想いをかたちへと昇華させる当社のエンジニアリング力と調達ネットワーク力に対して高い評価が寄せられた。

年5月に部分的に供用再開、23年10月に全面再開に至り、コロナ禍にもかかわらず、最終的に2カ月短縮での竣工を果たした。同11月1日には、シンガポール上級相、運輸相らが出席し、当社からは名誉会長も招待を受け、盛大にオープニングセレモニーが開催された。テオ・チー・ヒアン上級相からは工期短縮での竣工に対する感謝と、ねぎらいの言葉を受けた。

多くの諸先輩が、50年という長い年月をかけて信頼関係を築いてきたシンガポール、そしてチャンギ空港において、再び大規模改修工事に携われたことは大変光栄である。今後も、TEAMAKAのDNAともいうべき、「棟梁(とうりょう)の精神」で、「ものづくりの精神」で、さまざまなプロジェクトに挑戦すること、シンガポール社会に貢献していきたい。

(シンガポール竹中生産統括部長 へ当時チャンギ空港第2ターミナル増改修工事作業所長 山本裕之)

最大限に発揮した。特徴的な建築仕上である3次

